

# 家庭科

## 潤いのある生活を求め、創り出す子供の育成

～ものの見方を工夫し、やってみることを楽しむ授業の構想～

子供たちが生活の中で体験したことは、強く印象に残ります。そして、その中から多くのことを感じ、考えるようになります。

そこで家庭科では、授業において実践的・体験的な活動を多く取り入れ、その活動から実感として得られることを大切にしてきました。また、家庭生活とのかかわりを生かしながら、学習を進めてきました。それらのことから、衣食住にかかわることについて家庭や自分に適する方法を見つけ、家庭生活で実践していくことを楽しんで欲しいと願いながら研究を進めてきました。(家庭科主任 石渡 美穂)



### 1 研究の方向

#### (1) 研究の経緯

昨今の子供を取り巻く社会問題の起因として、家庭教育力の低下、家族の中での人間関係の希薄化があげられている。また、家族構成の変化や家庭での価値観の多様化から、手を使った家事にかかわる機会が減少してきている。その結果、子供たちは日常生活における様々な生活体験が不足したり、日本古来から伝承されている生活の知恵を学ぶ機会が少なくなったりしている。

このような現状を考えていくと、これから子供たちが生きる力を身に付けていくためには、生命の維持や心身の成長発達などにかかわって基本的な営みが行われる家庭生活に、しっかり目を向けていく学習をしていかなければならないと感じる。そのために、家族とのふれあいを生かしながら、家庭科学習で基礎的・基本的な力を身に付け、その力を活用し家庭生活で実践していく態度を育てていくことを大切にしたいと考える。また、これらのことは子供が自分に自信と誇りを持って、将来にわたって家族や社会と共にたくましく生きていく「次代を担う姿」につながると考えられる。

また、これまでの家庭科の研究では、「してもらう自分」から「する自分」を目指す子供を育てるために、人やものとのかかわりから実感したことを大切にする授業を検証してきた。そこから実践的・体験的な活動を工夫することで、子供は「できた」「わかった」という喜びや満足感を味わい、実践につながる意欲を高められるという成果をあげてきた。さらに、そこから、子供自身が家庭の営みを理解していくためには、実践的・体験的な活動の在り方を見直し、その活動から家族や友達の見方や考え方のよさやものの価値等を実感しながら学べる場を意図的に設定し内容を工夫していくことが重要であり、今後追究していく必要性を感じた。

#### (2) 目指す子供像と研究主題の設定

本校の全体提案「次代を担う子供たちへ」の目指す子供像「自分の力を精一杯発揮しながら、他を思いやり共に学ぶことに喜びを感じる子供(集団の中で)」より、家庭科では、家族とのコミュニケーションを大切にするすることで家族を思いやったり、友達と共にものを大切に扱いながら作ったり、実践的・体験的な活動をしたりすることで、当たり前前に思っていた家庭生活で行われていることを楽しめるようにしていきたいと考えた。そのためには、自分の成長を支えてくれている家族の愛情と家庭の働きを知り、自分ができることを進んで考えようとする豊かな心を育てることを常に意識できるようにしていきたい。また、「よりよい自分を作ろうとし、自分自身を輝かせようとする子供(個人として)」と関連させ、教科の学びを創意工夫して生活に取り入れ、生活を創っていく一員としての自覚と自信を深め、潤いある生活を創り出す子供を育てていくことを考え、家庭科での目指す子供像を以下のような姿ととらえた。

- |  |
|--|
| ア 家族の思いや友達の見方・考え方を生かし、ものを大切に扱いながら作る思いややり方のよさを受け止め、自分の考えややり方を創り出していける子供 |
| イ 自分の生活から課題を見出し、学んだことを活用しながら解決していこうとする子供                               |

この子供像に迫るために、これからの研究主題を「潤いのある生活を求め、創り出す子供の育

成」とした。ここで、潤いのある生活とは、「家族とのふれあいを大切に、よりよいものを目指していく生活、さらに自分の実践から家族への思いやりが深まり、衣食住にかかわることを主体的に創造していこうとしている生活」ととらえ、それを創り出せるような子供を育てていこうと考えた。

そして、授業において目指す自分に向かって学習を進め、そこで身に付けた力を発揮して家庭で実践していくことが潤いのある生活を求め、創り出していくことととらえ、学校と家庭の双方向の学びの積み重ねで子供を育成していこうと考えた。

### (3) 研究副主題の設定

研究1年次は、全体提案を受け「互いに高め合い響き合う授業づくり」を目指し、子供たちの生活体験不足を補うために、人やものに主体的にかかわり、実践的・体験的な活動を通してやってみる楽しさを実感しながら基礎的・基本的な力を身に付け、それを友達や家族と交流していくことで、学んだことを実際の生活に結びつけていく授業を実践していくことを考えた。

そこで、家庭科の副主題を「ものの見方を工夫し、やってみることを楽しむ授業の構想」とした。子供が自分を支えてくれている家族や友達とのかかわりを意識した上で学習を進め、家庭生活の成り立ちや家族の思いを理解したり、友達からよりよい方法を学んだりしていこうと考えた。

## 2 研究の内容

### (1) 自分と家庭生活、自分とものとのかかわりを生かした題材展開の工夫

家庭生活においては、優先されるものがそれぞれの家庭によって異なり、「豊かな心を育みながら生きる」ことのよさが感じられにくくなっている。そんな中、家庭科では家族とのふれあいを重視したり、ものの価値やものへの愛着を感じて「もったいない」意識を持って生活したりする意義を子供たちに教えるなどして、豊かな心を育てていくことを大切にしている。そこで、題材全体を通して、家族とのかかわりやものの大切さを意識して、自分が生活している基盤と先人の知恵に触れたものの価値を感じて学習に取り組んでいけるようにしたいと考えた。

#### ア 家庭生活とのかかわりを生かした学習過程の在り方

見つめる・とらえる段階では、これからの学習内容に関連する基礎的な事項について、子供たちにアンケートで問いかけたり、体験の場を設定したりして、これまでに身に付けてきた知識・技能を子供と教師が共に把握することから始める。この後に家族とのかかわりを意図的に設定し、学習内容全般に関する問いかけをして家庭生活や自分を見つめるようにしたり、家族の思いや願い、家庭生活の工夫など具体的に観点を持って見つめたりする。これらの活動から、子供たちは自分の家庭ならではの思いやり方があることを知り、それまで意識していなかった生活から主体的に家庭生活にかかわるきっかけを作ることができる考えた。そして、学校では、子供に家族の一員である意識を高めつつ、自分ができることを増やしていくよう働きかけて課題設定につながるようにする。その課題を解決していくことが、自分の生活をよりよく創っていくために必要な力を身に付けることになると思えた。

やってみる段階では、実践的・体験的な活動から気付いたことや疑問に思ったことを家庭に持ち帰り、自分の家庭生活をもう一度見直したり、家族の思いや考えを聞いたりする。このような学校の学びと家庭での実践をつなげるために家族とのかかわりを重視していくことは、家族とのつながりを深め、新たに知識や技能を積み重ねたり、よりよい方法を学んだりして、次への活動意欲を高めることに結びつくと考えた。そのことで、家族も子供が学んだことを知り、改めて成長を喜んだり、子供を見る目が変わったりすることが期待される。

生かす段階では、1題材の学習のまとめを家庭に持ち帰り、これまでの学習で身に付けた力について家族に伝えていき、家族を思いやった実践につながるようにする。

#### イ 生活の知恵に触れ、ものの価値を感じることができる教師の支援

子供が主体的に生活しながら、ものの価値を感じて生活していけるような心の豊かさを育んでいく授業の中で、先人の知恵を始めとした生活の知恵を伝えていくことで、子供たちがその思いを受け止めて自分のものの見方を身に付けていくことを考えた。また、物質的な豊かさに満足することなく、ものとのかかわりを考え、ものを使い切ることやそのもののよさを見直す意識を高めることも考えた。

具体的には、やってみる段階で題材内容によって生活の知恵を生かしていることを教える場

を設定していくようにする。例えば食に関しては、食品そのものに至るまでの加工過程を伝え、固いものを食べやすくしたり、保存しやすくしたりするなどの先人の知恵が生かされていることを教師が実物を提示しながら教えていくようにする。これらのことから、子供たちには、ものの価値を感じて学習活動に取り組めるよう、ものの見方の支援を継続していくようにする。

また、今日的な課題として自給率の問題や環境問題などを取り上げて、自分の目で確かめてものの選び方や買い方を考えたり、ものの使い方を見直し、すぐに捨ててしまうことからものを使い切ることを大切にしたりする意識を高めていく。これらの考え方で調理実習や生活に役立つ物の製作などに取り組み、ものの準備・購入の仕方や分量の決め方、使い方に生かせるようにする。

#### 【日本の味「ごはん」とみそ汁」を作ろうー加工品 5年】

みそ汁のおいしさの決め手の一つであるみそに注目し、みその材料である大豆・塩・麴を提示して、大豆の加工品であることを教えていく。固い大豆からみそにする加工過程の中に先人の知恵が生かされていることを伝えて関心を持って扱えるようにした。



#### 【布の使い方の見直し 6年】

着なくなった衣服や不用な布を用いて、その組み合わせを工夫して縫っていく活動を取り入れた。子供たちは布の使い方を学び、出来上がりには今までとは一味違う作品のよさを感じ、布を活用する喜び、生活に生かす楽しみを感じることができた。

### (2) ものを多様に見つめる視点を生かし、活用する力を育む学習活動の工夫

子供が生活するために必要な力を学び、身に付けた力を必要に応じて活用することができるようになれば、意欲的に生活にかかわり、家庭における実践的な態度が育つと考えた。そこで身に付けたことを活用する大切さや必要性を子供自身が感じて、生活する上でのこつから学ぶ楽しさを味わえるように、伝え合い活動を取り入れることを考えた。

#### ア 主体的にやってみることを楽しみ、基礎的な力を身に付けていく学習の進め方

やってみる段階で、子供が課題解決学習の中でわかる・できる楽しさを感じれば、主体的に学び基礎的な力を身に付けていけると考え、その楽しさにつながる学習の進め方や場の設定を工夫することとした。そのために、課題解決学習では、子供が未体験の活動を重視して段階的に進めたり、生まれた疑問を解決するために同じことを繰り返したりして、子供自身が新たな気づきを得て、基礎的な力を身に付けていくようにした。

さらに、子供たちがやってみる楽しさを味わうためには、ものに触れながら五感を働かせて確かめ、そのものの特徴をつかんだり、意外性を味わったりできるようにすることが大切だと考えた。体験活動の場では日常的なものを取り扱いながらもその中に疑問を持たせたり、新たな発見をさせながら子供に揺さぶりをかけ、知的好奇心が高まるような要素を盛り込んだ活動をすることで、もののよさを感じて再発見できるようにする。

また、ものの見方を変えられるように、出来上がりのものから製造過程を逆にたどり、部分的に見せるなど提示の仕方を工夫し、子供がものの変容をとらえて思考を深めていけるようにする。そして、ものを多様な視点で見るとおもしろさを感じ、気付いたことをもとに試しの活動や製作・実習につなげていくようにした。

#### 【日本の味「ごはん」とみそ汁」を作ろう 5年】

##### 〔みそを味わう〕

みその種類によって何が違うのかを食べたり、お湯に溶かしたものを飲んだりして味比べができる場の設定をした。見た目で色が違うことは分かるが、味わうことで一人一人が感じることを大切にしたい。この活動から、家庭で使っているものを思い出し、我が家なりのこだわりがあるのかどうかを考えることを大切にしたい。

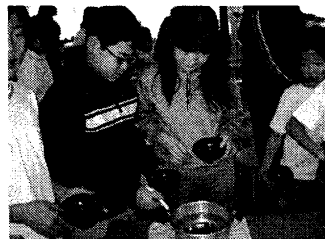
〔「素材」と「だし汁」のつながりを感じる〕

〈素材を味わう観点〉

- ・ 噛みごたえ
- ・ 味（噛み始めと噛み続けている時）  
（部位による味の違い）
- ・ におい

〈だし汁を味わう観点〉

- ・ 香り
- ・ 色
- ・ 味



にぼし、こんぶ、かつおぶしの3種類のだし汁について、何の種類のものであるかを味わいながら考えさせる場の設定をした。子供たちは観点にそって調べ、自分が感じたことをもとにだし汁の種類を決めていたが、その決定の理由を問いかけて自分の味わいを友達と確かめるようにさせた。また、だしの素材そのものを味わせて、それぞれに噛めば噛むほどにうま味が出てくことや、にぼしは部位によって味が違うことに気付かせ、そのことからだしの扱い方を考え、だしの取り方に関心を持てるようにした。

### イ 観点を明確にして活用する力を育む伝え合い活動

子供たちが家族へ思いやりを持ちつつ、学校で学び、身に付けた力を発揮し、よりよい生活を創り出そうとする態度を育てられるように、学習過程における探究活動を大切にしていく。そのためには、授業で学んだことを授業の中で活用しながら自力解決を図り、結果を得ることだけに満足しないで、それまでの学習過程を振り返り、友達と学びを共有できるように伝え合う活動を大切にすることを考えた。

そこで、やってみる段階では、学習活動の振り返りにおいて、成功・失敗にかかわらずその結果に至った要因を探り、自分で整理した後伝え合う活動を行う。ここでは、自分ができるようになった理由やうまくいかなかったことの原因を中心に発表し、お互いの発表から作業のこつを学びとり、実践へとつながるようにする。

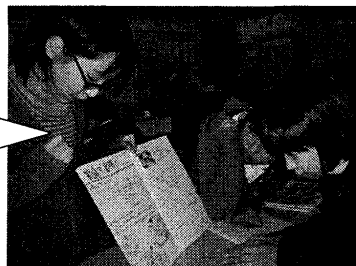
生かす段階では、家庭での実践後に伝え合う活動を位置づける。実践する前には、授業でまとめる観点を説明し、学校での学びをもとにして家庭でより高い目標を持って実践することを意識できるようにする。また、家庭では材料や時間等について家庭のやり方に合わせて作ることができるので学校で学んだことをもとにしながらも、材料や味付けを楽しむことができる。学校での学びから家庭実践の意欲を高め、子供たちは繰り返し実践することで、新たな発見をしたり、以前よりできるようになってきたことを感じたり、日頃の家族の大変さを知り感謝の気持ちを持ったりと、いろいろなことを感じることにもつながる。そこから気付いたことや感想をまとめて再び授業の中で伝え合いの活動を行うことで、友達の実践を共感的に聞き合ったり、自分の実践と比較しながら聞いたりして、自分に必要な情報を得ることができる。そのため、題材に合わせて、これらの観点を絞り込み、子供たちが自信を持って家庭での実践を発表できるように、伝え合う形態などを工夫していくことにした。

### 【家族の健康クッキング 6年】

〔伝え合う観点〕

- ・ 学校での学び
- ・ 自分の家庭に向けて工夫した点
- ・ 家族の感想、自分の気づき
- ・ 実践から生まれた課題
- ・ 題材全体の学び
- ・ 自分の発見・家庭生活の発見

学校の学びを家庭にどう合わせたか。友達の実践を楽しみに聞きながら、自分の実践に自信を持ったり、さらに学ぶことを見つけて家庭での実践意欲を高めたりすることができた。



### 3 成果と課題

実践的、体験的活動を十分に取り入れたことで、友達とともに生き生きと活動しながら、ものの価値や特徴を感じることができるようになった。また、家庭とのつながりを生かしたことで、授業や家庭での実践意欲の高まりが見られた。今後は、子供たちが基礎的・基本的な力を効果的に身に付けられるような実践的、体験的な活動をさらに研究し、家庭での実践を楽しむとすることのできる子供を育成していきたい。